
ラブカオス★ライフ

鍋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカオス★ライフ

【Nコード】

N6294V

【作者名】

鍋

【あらすじ】

主にカオスなものを取り扱った恋愛短編集です。「こいつら馬鹿だろ」「ありえない」と笑って下さったら本望です。皆さまが少しでも楽しいラブカオスライフを送れますように！！
詳しくは『初めに』をお読み頂けると幸いです。

初めに

これは設定、人物、物語上の展開がカオスの短編恋愛（？）小説集です。

以下の注意事項を読んで、容量・用法を正しく守り楽しいカオスライフを送りましょう。

1、カオスなのでベタな王道を期待する方にはオススメ出来ません。
2、しみりとした展開は1割ぐらいしか盛り込まれていません。
シリアスをお好みならばオススメ出来ません。

3、舞台が同じな為お話が若干繋がったりします。特に某部長が頻繁に出てくるので注意しましょう。

4、ほぼ女の子視点で書かれています。女性視点が苦手な方は注意です。

5、こんな設定こんな組み合わせの友人や男女カップル、またあのキャラが見たい、等のリクエストを随時受け付けておりますが、私のカオス魂がノった時ぐらいしか参考に出来ません。ご了承下さい。

6、不定期更新です。

…こんなもんですかな。

以上長くなりましたが、ここまで読んで頂けた貴方様に最大級の感謝と愛を捧げます。

それでは鍋でした。
良いカオスライフを！

ぐーちよきぱーは死活問題に適用するか（前書き）

新聞部の皆さんです。

ぐーちょきぱーは死活問題に適用するか

学校の放課後。

私は友人からのケーキ食べようなどという甘い誘惑から必死に耐え、一心不乱に社会科教室に向かっていた。

目的は、ある部活の手伝いの為。実を言うとその他にも下心なんかも入っちゃってるわけなのだが、一応の目的は部活の手伝い。

そう、部活―新聞部の。

「絶対駄目だ！ 俺はそんなの断じて認めんぞ！」

「！」

社会科教室のある4階へ一気に駆け上がって辿り着くと、廊下から聞き慣れた先輩の声が聞こえた。その後からも、また聞き覚えのあるおちゃらけた声が聞こえた。

「お前に認められんでも勝ちなんだよ、馬鹿！」

「な、何やってるんだろう先輩達…」

声は社会科教室から。きつといつものように漫才事でもしてるんだろう。私は呆れからか疲れからか緊張からか、ふうと息を吐き出して、教室のドアに手をかけ引っ張った。ドアは学校特有の音をたてながらスライドして開いた。

「こんにちはー」

「あ、こんにちは遠山さん」

「理恵ちゃん！ ちょっと聞いてよ、後がさー」

中には、予想通り2人の先輩が長机に本をたくさん広げて立っていた。

1人は黒髪で服装の乱れなくきちんとした印象の後良太先輩。^{うしろ}

もう1人は茶髪でシャツの下には派手な黄色Tシャツを着た、ラフな印象を持つ前川空先輩。

2人共仲が良く、喧嘩という名の漫才をよく2人の世界で繰り広げている。

通称、前後コンビ。

私が長机に鞆を置くと、前川先輩は私の方を向き、ビシリと後先輩を指差す。

「ぐーちよきぱーは駄目だって言って聞かないんだよ!」

「ぐーちよきぱー?」

「ほら、遠山さん知らない? じゃんけんにおいてぐー、ちよき、ぱーの全ての役割する手の形」

後先輩は私に分かりやすいように、手を前に出して、開いた状態から薬指と小指だけを折曲げた。

「あー…昔流行りました。最強なんだぜみたいナ」

「そう! 後、今の言葉聞いた!? 最強なんだよ!」

前川先輩はいつものようにテンション高く抗議する。後先輩はそれを聞いて、いつものように冷静に呆れ半分怒り半分みたいナ顔で反発する。

「高校生の脳で良く考えてみる前川。相手が何を出そうが勝ち、あいこ、負けは必須なんだよ。だから総合的にあいこ! そして無理

に勝とうとしたお前の反則負けだ！」

「はああん？ 言ってる事が矛盾してますケドー。なんなのあいこだ負けだって。勝ちがありゃ勝ちなんだよ！」

「じゃあ俺も勝ちだろ！」

「俺のルールが後に適用するハズないだろ馬鹿！ この自意識過剰！」

「差別だ！ 俺は今理不尽な差別を受けている！」

「……あの…」

試しに声を掛けてみたが、全く聞こえないらしく、未だ言い争いを続ける先輩達。こうなったらもう一般人では2人を止められない。止められるのはもう、あの人しか…。

と、思った時、噂をすれば影といった感じで、華やかな曲が教室に大音量で流れ始め、私はもちろん言い争いをしていた先輩達もビクツと肩を震わせた。

続いて、ドアが開く音。

「やあやあやあやあ！ ご機嫌如何かね、僕の愛しい親友達よ！」

すると先輩達はあからさまに苦い顔をしてその人を出迎えた。

「登場する度に曲流す変人を親友に持った記憶はないが」

「ちょ、マント邪魔だよたなびかせんなよシモ！」

大音量の曲に、マントを肩に携え、謎の技術で背後からの風を身に纏って登場した男の人。

何を隠そう、この人が新聞部の部長、下敷領戦先輩^{しもしきりょう せきやう}。後先輩によると立派なのは名前のみで中身はただのヤケに目立つ変人だという。

残念ながらその通りだと思う。

「こんにちは…下敷領先輩」

「やあ遠山嬢、手伝いご苦労だね。そんな偉い君にはご褒美として僕のテーマ曲をプレゼントさ、さあおいで」

「遠山さんに触んな変態」

「いらないから、そんなの金払ったっていらないから」

「まあそうだね。この曲はもう、君達の脳に刻み込まれてるようなものだしね」

「「やめろ！ 事実だとしてもやめろ！」」

いつも通り、下敷領先輩の事となると息がピッタリと合う先輩達。それも凄いが、引けを取らない部長も凄いと思う。いや、もう存在だけで凄いけど。

私は言い争いが止まった事を良しとして、本題に入った。

「結局どうしたんですか？」

「ああいやね。僕とした事がインタビューメモを借りてた本に挟んだまま返してしまってたね」

「それをメールで知った俺らが、どっちが図書室に行くかじゃんけんしてたって事」

「ああ…」

新聞部には、極力会いたくない人が1人居る。それは図書委員長の蓬田先輩だ。

大分前、部長の作った新聞に図書委員長のプライベートを書いた事があり、それ以来図書委員長は新聞部、特に部長を目の敵にしている。被害にあった図書委員長も巻き込まれた先輩達も、可哀想な話だ。

顔を青くする前後コンビ先輩に、私は手を小さくあげる。

「じゃあ私行きますよ、私ならまだお手伝いの身ですし」

「駄目だ遠山さん！ そんな事したら後々俺らが先輩に『女性に頼むなんて、臆病もいいとこだね君達』って鼻笑いされるんだ！」

「え…」

後先輩が頭を抱えながら私の意見に反対すると、前川先輩はバンツと長机に手をついて呆れた声を出した。

「だーかーらー、後が行けば良い話なんだろう！」

「嫌だ、ぐーちよきぱーなんて真剣勝負に適用しない！」

「じゃんけんはじゃんけんだろう！」

「こちら精神的死活問題なんだぞ！」

「そんなの俺だって一緒だよ馬鹿！ 誰があんな陰険鬼畜眼鏡にわざわざ会いに行くか！」

しまった。また始まってしまった。一度始まるとどうしても周りが入らなくなってしまうようだ。

仕方ないから行ってこようとドアへ向かったが、今まで大人しかった部長がぐわしと力強く私の肩を捕まえて止めた。

「！？ ぶ、部長…？」

「遠山嬢はここに居てくれたまえ。…前くん！」

「何さ！」

私を元の位置に戻した部長は、高らかに声を上げ、2人の間に滑り込んだ。

「君は僕と共に来るんだ！」

「はああっ!? 何その悪役みたいなセリフは!」

「おお…、珍しく下敷領が俺の味方についた」

部長は、抵抗する前川先輩をいとも簡単に担ぎ上げ、外へ出た。
そして登場と一緒に曲がまたどこから流れる。

「わああやめろ馬鹿ー!」

「ではごきげんよう!」

「ま、前川先輩…」

ピシヤリとドアが閉められ、テーマ曲も段々と小さくなっていった。残された私と後先輩は曲が完全に聞こえなくなるまで前川先輩の居なくなった入り口を見つめ、呆然としていた。

そしてそのあと、後先輩はため息をついて、静かに椅子に座った。

「…とりあえずじゃあ新聞作成しようか」

「は、はい…、あ」

「? どうしたの?」

「な、なんでもないです!」

「?」

静かになって、もしやと今更ながら思う。

もしかして部長、私が後先輩の事が好きだと気付いて気を使ってくれたんじゃないだろうか、と。

そう、私は後先輩が好きなのだ。最初新聞部に手伝いに来た時から。それからというものの、ちよくちよく新聞部に通い、友情やケキよりも恋心を優先する汚い私が完成したわけだ。

それがバレていたのだとしたらそれは。

…恥ずかしい! 人として恥ずかしい!

「…どうしたの？ 顔赤いけど」
「へ！？」

このままでは先輩本人までにバレてしまうと、私は必死で話題を変えた。

「え、えっと、先輩達は部長にタメ口ですけど、確か部長って3年ですよ？」

「ああ、うん。新聞部に入らされた時に下敷領がタメ口使ってくれたまえて」

「へえ…部長が…」

先輩は、新聞の内容をまとめながら、昔の事を思い出したのか楽しそうにくすりと笑った。そう、私は先輩のこの笑顔が好き。

「最初は敬語使ってたんだけどさ、コイツに敬語使うぐらいならアリにでも使った方がマシだって前川と話してね」

「酷い言われようですね」

「ははっ遠山さんもタメでいいよ？」

「いいえ、私が使ったら緋色ちゃんに裏で何をされるか」

「あー…そういや中3の妹いたんだっけアイツ」

色々と風変わりな部長だが一応は人の子らしく、親もいれば兄弟も居る。だがその妹もかなりの変人で、脳裏にあの縦巻きロールがよぎる。

「はい、前部長のマントちょっと踏んでしまった時なんてそりゃあえげつけない仕打ちを…いたっ！？」

あの時の惨状を伝えようとしたら、急に酷い頭痛がした。ぎりぎりと締め付けられるような痛みが未だ私を苦しめる。

痛い、死ぬほど痛い！　なんだコレ、呪い！？　怖っ！！

「だ、大丈夫か！？」

「あ、はいいたたたた！！」

「ちよっ大丈夫じゃないなそれ！」

「は…話す事は…万死に値する…いたた！」

「やばい遠山さんが何かに取りつかれてる！　帰ってこい！」

後先輩が立ち上がって、私の頭に触れてくれるが私はじっとしてられない痛みが全身に伝わる。

どうしよう！　死ぬ！　死んじゃう！

「遠山さん！」

「…………っ！」

その時、引っ張られた、と感じた時には、私は先輩に強く抱きしめられていた。反射的に離れようと抵抗したが先輩の手がそれを許さなかった。私の頭は真っ白になり、頭痛がいつのまにかぶっ飛んだ。

「…落ち着いた？」

「は、はい…おかげさまで…」

「良かった…」

先輩の安堵する息が耳にかかって、今度は恥ずかしさが全身を覆った。だが離れようにも先輩の手は私の背中に固定されている。

なにか言わなければと口を開いた瞬間――

「緋色のおまじないは効くからねえ」

「え…っ」

「な…っ」

部長の声があることか天井から聞こえた。

ぱっと離れ、先輩と同時に上を見上げると、そこには誇らしげに天井にへばりつく部長が居た。部長は私達が気付いたのを確認すると、マントをばさばさと揺らしながら地上へと着地した。

「やあ2人共。戻ってきたらあまりに雰囲気はロマンティックだったから、天使のような微笑みで天井から眺めてた次第さ！」

「なあ…天井に張り付けられるメカニズムを解明した上でそろそろお前という名の人種について説明してくれ」

「人間、根気があればできる、なんて言葉があるだろう？ 出来たのだから人間さ」

「そんな言葉ごり押しする時しか使わん。俺はお前を同じ人種とは認めんぞ！」

「後くん。大事なのはハート、いわば魂さ」

「五月蠅い黙れ人の皮を被った覗き見の変態め」

「ま、まあまあ…」

「…てゆうか人が魔の図書室言ってる間に…」

なんとかなだめようとした矢先、視界の隅で前川先輩の残像が見えた。やばい、と感じた時には前川先輩は後先輩にとび蹴りをくらわせようと宙に浮かんでいた。

「何やってんだセクハラー！！」

「うおおっ！？」

「きゃああっ」

しかし間一髪で避けた後先輩に舌打ちし、身軽に着地した前川先輩。

「はずしたか…」

「お、お前、遠山さんに当たったらどうする…」

「俺がとび蹴りのコントロール狂わすはずないでしょ、何言ってるの？」

「過去最高にむかつく顔しやがって…」

「…あはは…ふう…」

新聞部日誌

担当…遠山理恵

結局メモは見つかったけれど、前後コンビと自称人間の争いは完全下校時間まで続き、新聞製作はまともに進みませんでした。

緋色ちゃんのおまじないは死ぬかと思いました。腕が確かなのは立派かと思いますが、死ぬレベルの呪いはやめて欲しいです。

あとぐーちよきぱーは死活問題に関わる場合は無効にしましょう。

コメント

後…いつも迷惑かけてなんかごめんな。下敷領のグチがあったら国外まで付き合うよ。

前川…→賛成ー（＾０＾）

下敷領…おやおや君ら。緋色のおまじないがたかだか日本を出たくらいで効かなくなると思いかね。

前川…マジかよ。

後……科学が進歩したら俺らで地球出るか。

ぐーちよきぱーは死活問題に適用するか（後書き）

部長と前川くんの図書室での話はまたの機会に書けたらな、と思っています。

身体は子供、態度は大人。その名は…！（前書き）

サブタイトルはアレですが推理なんかしませんよ。

身体は子供、態度は大人。その名は…!

「許さんし…絶対許さん…」

時は昼下がりの日曜日。周りにはアベック共がたいそうイチャコラしてる中、1人寂しくあまり来た事のない道をうろうろとしながら独り言をこぼしている女子高生の姿があった。

…てゆうか私だった。

「理恵め…みてろ、めちゃくちゃ自慢してやるからな」

最近の私は友人にふられまくっている。一週間前くらいから新しく出来たケーキ屋に行こうと誘っているというのに、やれ委員会だやれ部活だ。しかも部活には好きな人がいるときた。さすがのポジティブ女王と呼ばれた私でも嫉妬するわ。

「あーでも自慢したらしたで『じゃあ頑張って先輩誘おうかな…』とか言うんだぜ、畜生可愛いなこの乙女が!」

とゆうわけでしびれを切らした私は1人でケーキ屋へ行き、おいしかった事を自慢するという暗黒の計画の為、今現在でかい独り言をぶつぶつ言いながらうろうろしてるわけだが。

「…で、ここどこだろ」

THE☆迷子。

女子高生にもなって迷子確定してしまったわけだ。恥っずかしー私。

私は持ってきた地図をもう1度見直し、首をひねってみる。周りに書いてある建物すら見つからないのは何故なんだろうか。

今私の目の前にあるはずなのは、図書館であって西波児童公園ではないのだが。

…仕方ない、誰かに道を聞くしかないようだ。

すると、ちょうどよく1人の小学校高学年ぐらいの少年がブランコに座っているのを見つけた。あの子にしよう。

「はあい、その少年」

「……」

児童公園に入り、すぐナンパっぽく少年に話しかけると、少年はゆっくりと下に向けていた顔を上げた。

ま、なんとも美少年。

だがやばい、顔が完全に不審者用だよコレ。とりあえず誤解を解かないと。

「何でしょうか」

「…ちよーっと道聞きたいんだけどいい？」

「構いません」

少年はなんともランドセルをしょっているとは思いがたい丁寧な口調で、すくっと立ち上がった。

世の中にはこんな大人っぽい小学生が居るとは。私はちよっと堅くなりながらもさっきの地図を少年に見せた。

「このケーキ屋なんだけど」

「……貴女…」

地図を指差すとすぐ、少年は眉をひそめ、呆れた声を出した。
あり、私そんな変な事言ってるかな。

「これは真反対ですが」

「えっ!？」

「なぜ 東山まで行くのに西波に来るのですか」

「…あ、あはは、ぷえー」

少年に睨まれ、私は反論の余地なく頭をかいて笑った。まさか真反対だったとは、これは予想外。

「ケーキ屋アニマはこちらを通ってここまで出て、信号を右です。
郵便局が見えますからその道を真っ直ぐ」

「ふんふん」

少年は私に方向音痴の気があると悟ったのか、懇切丁寧に地図を指でなぞりながら教えてくれた。大変よい子である。

「…で着きます」

「ありがとう、助かったよー。じゃあ!」

「ちよっと!？」

「ほ?」

さっそく行こうと小走りすると、少年に服を掴まれた。振り返ると、さっきよりも訝しげな顔をしている。

何だろう。寂しいのかな?

「僕はどちらに行けといいましたか」

「? あっち」

「…………、では次は」

「あーそっち？」

「……………」

聞いた少年は目を閉じて息を吐いて、深く息を吸い込み、そして私に回し蹴りを食らわせた。

「痛い!？」

「全っ部逆ですよ！ 何も分かってないじゃないですか!」

「そ、そんな怒らんでも…。大丈夫だよ歩いてたらいつか着くよ」

「貴女の言う通りに行ったらまたこっちに来るんですよ！ てゆうかいつか着くなら僕に聞くな!」

「ほ、ほら、聞かぬは一生の恥ってことわざが…」

「もう十分恥ですよ!」

静かな子が怒ったら怖い、というのはこういう事か。足がめっちゃくちゃ痛い。そうだな、あれだけ丁寧に教えてくれたのにすっからかなのは悪かったかもしれない。

私は叫んで息切れする少年に頭を下げた。

「覚え悪くてごめん！ もう1回だけ教えて少年!」

「……、はあああ」

しばらく頭を下げていると、少年からかなり深いため息をつく音が聞こえた。

「すみません、貴女相手にいきなり叫んだりして。僕が悪かったです」

「え、それ謝ってるようで全く謝ってな…」

「ついてきて下さい」

頭を上げると、少年は私の横を通って児童公園を出た。私が突っ立ったまましていると、少年はばつが悪いように目線を下げたまま振り返った。

「：案内します。蹴ったお詫びです」

「え、ほんと!？」

私は思わず嬉しくなって、少年のもとまで駆け寄った。

「じゃあよろしくお願いしますっ!」

「：は、はいはい」

すると少年は照れくさそうに下を向いて、進み出した。そんな様子は、とても子供らしくてランドセルが良く似合うと思った。

私はなんだか友達が増えたような気分になって、上機嫌で少年の後ろを歩く。

「私、中村かすみ。君の名前は？」

「透也^{とつや}：です」

「透也くんね!」

何故か苗字は教えてくれなかったが、そんなものはどうでもいいか。名前呼べればそれでいいんだし。

「私は高1なんだけど透也くんは？」

「小5です」

「そっかー、勉強は大変？」

「いえ。かすみさんは？」

「呼び捨てでいいよ。私はもう涙出るよ!」

「どうゆう涙かは聞かない事にします」

「うん、空気の読める大変良い子だねー」

外見はそのまま小学5年生だが、中身は大人顔負けの礼儀正しさだ。

きっと頭もいいんだろうなあとしみじみ思っていると、透也くんはピタリと止まった。

「ここです」

「おお！ ア・ニ・マ。すごい、あつという間だよ！」
「褒められたところで全く嬉しくない距離ですが」

いつの間にか目の前には小綺麗なケーキ屋さんがあった。お客さんもそれなりに居るそうで、外から色とりどりの鮮やかなケーキ達が見える。…お腹すいて来た。

「…ところでアニマってなんだろうね？」

「ラテン語で魂という意味があります。他にもユングの提唱した説では男性の女性的な面の事をいいますが、どういう意図でアニマなのかは分かりませんね」

私のふとした疑問に、透也くんはさらっと涼しげな顔で答えた。
「どうやら大人っぽいのは口調だけではないらしい。私は思わず拍手を送った。」

「ふぉー、すごいね！」

「一般知識です」

「…知らない私はアホと？」

「そのようですね」

「……………」

何だろう、さっきからこのどっかで感じた事のあるようなエリート臭と涼しい顔のコンボ。まるでどこかの憎らしい陰険眼鏡委員長のような。危うく小学生相手に怒るところだった。

「では僕はここで」

「あっ…待って！」

透也くんは律儀に私に頭を下げ、戻っていきかけたが、さっきとは逆に私が透也くんのランドセルを掴んだ。透也くんから苦しい呻き声が出る。

「な、なんですか！」

「お礼、するよ！」

「は!?!」

「お待たせしました」

「はい♪」

「……………」

10分後。ケーキ屋付属の喫茶店で、アベック共に囲まれる中、一際年の差がある男女が居た。
てゆうか私と透也くんだ。

「…お礼なんか良かったんですけど」

「ほーら透也くんのショートケーキだよー」

「聞いてますか」

テーブルには私にティラミスと紅茶、透也くんにショートケーキとオレンジジュースが置いてある。どちらのケーキもすごく美味しそうだ。私はさっそく手を合わせ、ケーキに食い付いた。

「んー！ 美味しい！」

「…そうですか」

「ほら透也くんも！」

最初は渋っていた透也くんだが、私がじっと見ているとため息をついて一口食べた。

「…あ、おいしい」

「！ でしょ!？」

「…はい」

「良かったー」

透也くんの頬は心なしか緩んでいて、私もなんだか嬉しくなって笑った。紅茶を飲み、透也くんの様子をまじまじと見つめる。

「な、何ですか」

「かわういーなーと」

「はあ？」

透也くんからめっちゃくちや馬鹿にするような声が出た。こ、こんな声、理恵からもまだ聞いていないというのに…。

「何だいその声は。君みたいな可愛い少年とデート出来て嬉しいっているのに」

「デート。シヨタコンですか？」

「5歳差なら大丈夫だと…てゆうかそんな言葉どこから…」
「兄さんですが」

透也くんは普通の事のように答えた。その答えにまた陰険眼鏡が
脳裏によぎる。

「…、ごめん苗字やっぱり教えて」

「は？ 蓬田です」

「やっぱね！ やっぱりね！ あの眼鏡野郎！！」

完全に方程式が成り立ち、すっきりしたようながっかりしたような
感覚に陥る。

透也くんは不思議そうに首を傾げる。

「知り合いですか？」

「あーうん。図書委員繋がりで」

「そう…ですか」

「？」

何故か透也くんは悲しそうな顔をした。

何だろう、仲悪いのかな。いやいやシヨタコンなんて言葉教えこ
んでるんだし悪いわけないか。

…じゃあ何？

「…どうしたの？」

「え、あ、いえ。…その」

「うん？」

透也くんは言いづらそうに口を動かした。けどちゃんと伝えよう
とはしてくれているようだ。

「兄さんは完璧だから、たまに比べられるんです」

「え…」

「だからクセで苗字言わなくって…すみません」

「…っ！」

私はそれを聞き、素早く自分のティラミスを透也くんの口に放り込んだ。透也くんは突然の事に目を丸くする。

「透也くんの方が断っ然優しいよ！」

「もぐ!？」

「自信もっていいよ! 私はアイツより透也くんの方が百倍好き!」
「……………」

透也くんはぽかんとしたが、ゆっくり咀嚼すると、照れたように笑った。

「ありがとう」

「…う、ううん…」

透也くんの笑顔になんだか必死になった私が馬鹿みたいに感じて、恥ずかしくなってフォークを戻した。

な、なんなんだ私小学生相手にどぎまぎして。本当にシヨタコンになってしまったんだろうか。

「かすみ」

「っほあ!？」

いきなり名前で呼ばれ、思わず変な声が出た。

「な、何なんですか！」

「いやふいうちで…何？」

「はい」

前を見ると、イチゴがささった透也くんのフォークが前に出されていた。

「あげます」

「え…いいの？」

「はい、さっきのお礼です」

「…じゃあお構いなく」

私はそのままパクリと食い付いた。が、透也くんにとっては予想外らしく、顔を赤くして怒り出した。

「だ、誰がそのまま食えと言いましたか！」

「もぐっ！？ もぐぐもぐぐー」

「そのまま喋るなあ！」

その後まるで私の方が子供みたいに説教された。しかもその後フオーク取り替えてもらいやがった。畜生。

説教後ケーキ屋を出て、満足のため息が出る。空はもう赤みがさしていて夕暮れのようなだった。

「じゃあご馳走さまでした。そろそろ帰ります」

「あ、うん！ 色々ありがとう透也くん！」

「はい。あの…これ」

透也くんは前を向いたまま、横にいる私に何か差し出した。何か、と受け取ってみるとそれはメアドが書いてある紙だった。

「…これって」

「…楽しかったです。また遊んで下さい、…かすみ」

「…っっ！」

私は紙を握りしめると、可愛さのあまり透也くんを抱き付いた。

「ちょ、ちょっと！ また説教されたいんですか！！」

「だって嬉しいし可愛いしむきゃーほっぺ気持ちいー」

「変態、セクハラだ！ 帰ります！」

透也くんは私を押しつけて、走っていった。私は透也くん聞こえるように大きく言った。

「絶対また誘うよ！ 会いに行く！」

すると一瞬振り返った透也くんは私と同じボリュームで言った。

「…っっそうして下さい！」

「うん！」

その時私はこの上なく嬉しくて、もしかしてこれが、と胸の高鳴りを感じた。

「…で小学生が好きになったと…」

「てへぺろ☆」

翌日、友人に一部始終を自慢したら複雑な顔をされた。

「私の時はさんざん『あんなツツコミしか能のない奴忘れて私にしなよ!』とか言ってたのに…小学生な上あの蓬田先輩の弟」

「デスティニーって怖いよね!」

「………」

「ごめんなさいごめんなさい謝るから無言の笑顔で下敷領先輩のテゝマ流さないで」

「ふう。…まあでも応援するよ、頑張れ」

「! うん!」

こうして、小さな事から始まった小さな君への恋は小さく進んでいくのだった。

「呼んだかい1年生諸君」

「きゃあ部長!?! 何故窓から!」

「体育でね」

「うわあまとめたはずだったのに收拾つかなかった。てか先輩体育でもマントなんですネ」

「当たり前さ。地味な卓球をやるうとも華麗なバレゝをしようとも

僕の威厳は消え失せる事なくむしろ輝きを増し」

身体は子供、態度は大人。その名は…！（後書き）

少年がお姉さんを好きになる話は多いですが、お姉さんが小学生を好きになる話ってあんまりないなあと思います書きました。
小学生だっていいじゃないですか。

ラッキーアイテムは執事

「貴女の今週の運勢、特に恋愛運は最高ですわ。ラッキーアイテムは執事」

「ちよい待ち!？」

昼休み。占い、おまじない、更には呪いまでなんでも出来る、かの有名な下敷領さんに軽い気持ちで占いをしてもらったら、とんでも発言をされた。

「何スカ執事って」

「? 一家に一台はあると言われるでしょう?」

「どっから突っ込んでいいのか不明っスよ」

あえて全てに突っ込むとしたら一家に一台ないし、執事の単位台じゃないし、大阪でゆうたこ焼き機みたいに言うなるところだろうか。

下敷領さんは首を傾げた。ついでに左右についているクロワッサン、ではなく縦巻きロールが揺れる。

「あら、用意する?」

「いやいやまず執事をアイテムってところからおかし」

「チャイム鳴るから座れー」

手を振って原点から突っ込もうとしたが、残念ながら先生が来てしまった。

私はとりあえず下敷領さんにお礼を言い、自分の席に戻った。教科書を出しながらそれにしても、と思う。

恋愛運なんて私と全く関連性のないものが良いとは驚きだ。彼女

の占いはよく当たるともっぱらの噂だが、今回ばかりは外れたんじゃないかと思ひながら退屈な授業に耳を傾けた。

「……む」

気付けば辺りは静かだった。頭を上げ、少しぼうつとしてからやっと自分が放課後まで寝てしまった事に気付いた。どうりで空がオレンジなはずだ。

「おはようございます」

「あ、おはよ……、……」

まだ誰か居たんだと横を向くと、何故か限りなく執事に近い何かがそこに笑顔で立っていた。日本ではあまり見慣れない光景に、自分は寝起きというのもあって呆然とする。

「お帰りになりますか？」

「え？ あ、はい……」

「鞆でございます」

さっと出された鞆をとりあえず受け取る。執事は未だ笑顔だ。あんまりに笑顔なので少し警戒してしまう。

「悪いッスけど……どなたッスか？」

「緋色様の命令で今日からお世話させて頂きます、佐倉と申します
侑里様」

「ああ下敷領さん家の人ッスか、ご苦労さ……ん!?」

下敷領さん家はセレブと聞いていたので驚かなかったが、世話という単語で私の脳は完全停止した。

「自分の世話ッスか!？」

「はい。アイテムになってこいと仰せついています」

「アイテムって…!」

念のためにもう1度おさらいしよう!

Qアイテムとは?

A事項って意味もあるけど、この場合は衣服や服飾の事を言うよ! ★

「つまりは今日ずっと、僕は侑里様の服です」

「気持ち悪い事言うなッス!」

立ち上がって執事から距離を取り、否定の意を込めて両手を前に突き出す。

「別にいいッスよ、自分そままでして恋愛運上げたくないッスから!」

「しかし誓約書に判子も頂きましたし…」

「判子？」

執事がぴらりと見せた紙には始めに誓約書と大きく書かれていて、その下にびっしりと小さな文字で文が続き、最後には草壁侑里と書いてある横にくっきり赤い指紋があった。

「じ、自分こんな紙に誓約なんか…はっ!？」

まさかと思い、自分の親指を見ると赤いインクがべっとりついていた。

執事を睨むとなんか分からないけれど滅茶苦茶良い笑顔でこちらを見ていた。

「ね…寝ている間に工作したッスね!？」

「なんの事やら」

「そう言いながら内ポケットに朱肉をしまうなッス!」

優しそうなお兄さんかと思いきやとんだペテン師だ。

執事は朱肉をしまいきると、さてと言って自分に近付いた。

「それでは家に帰りましょうか」

「ちょ、待つッス、何を、きゃー!？」

執事はそのまま軽々と私を抱き上げると、難なく教室を出た。私はいつもとよりも高い視点に血の気が引く。もう放課後だから他の生徒が見当たらないのが不幸中の幸いか。

「は…離すッス!」

「はい靴履かせますよ」

「じ、自分で履け…ってなんで靴の場所知って…!」

「侑里様の事はあらかじめ調べましたので」

「変態だー!」

そのまま校舎を出て、ついには人の目につく場所までやって来てしまった。いくら某マントの男が見慣れたこの町でも、燕尾服を着た男が女子中学生を抱えて歩いていたら驚くだろう。

「恥ずかしい：恥ずかしすぎて死ねるッス…」

「おや、良い格好ですよ」

「お前実は楽しんでやがるッスね…？」

「何を言います」

ふと執事が止まり、やっと降ろされたと思ったらもうそこは私の家だった。近くて本当に良かった。

ため息をつき、ドアに手をかけるが、後ろの執事存在にはっと我に返る。

「…：入ってくるッスか？」

「侑里様がここで一晚過ごせとゆうなら入りませんが」

「！！」

執事はにこりとスマートに笑った。卑怯。絶対確信犯だ。

「…：そんなの出来るわけないッス」

「侑里様はお優しいですね」

「良く言うッス…」

仕方なく執事を中に入れ、鞆を部屋の入り口に落とす。すると既に帰ってきていた兄弟4人全員が騒ぎ始めた。

「え！？ 姉ちゃんが彼氏連れてきた！」

「彼氏？ 執事？」

「彼氏と執事兼用とかやるじゃねえか侑里」

「赤飯だね今日は」

「あゝ！！！！ 違うッス！ 説明は後からするから部屋に戻れッス！」

私が叫ぶと、兄弟は一樣にニヤニヤして部屋に戻った。私は息を切らしてエプロンを手に取る。すると執事がそれを自分から奪い、慣れた手つきで自分に着けさせる。

「あ、ありがとう…」

「今から夕飯作りでございますか？」

「はい」

エプロンのりぼんを結び終わると、後でじっと見つめる執事。その視線に私は諦めをつけた。

「…もうしょうがないから今日は1日ゆっくりして下さいッス。えっと…佐倉さん」

「ありがとうございます、と言いたいところですが、やはり本業は執事なのでお手伝いしますね」

「…分かったッス」

佐倉さんと私で、台所に並ぶ。料理は毎日自分が作るが、誰かと作った事は初めてなので何か緊張してしまう。

ちらりと横目で見ると、佐倉さんはこちらに気付いてまた笑った。恥ずかしくなって目を反らしたのは言うまでもない。

「へー執事がラッキアイテムねー」

夕飯が出来、兄弟全員＋佐倉さんで食卓を囲った。その際に今日起こった事を全て兄弟達に話したら納得してくれたようだ。納得し

てくれるのはいいが、少しぐらい驚いたらどうなんだろう。

「1日ご迷惑かけます」

「いや、ゆっくりしてって」

「…それにしてもー」

長男が佐倉さんに笑いかけると、次男はゲスい笑い方で私を見た。
何か嫌な予感。

「良かったなあ、こんなイケメン執事で。そのまま彼氏になっても
らえば？」

「な…」

次男の言葉に、三男四男とノってくる。

「そうだよ姉ちゃん！ こんなチャンスめったにないよ！」

「ラッキーついでにアタック？ んでゲット？」

「馬鹿共…！！」

男性と接するチャンスがめったにないのは事実だとしても、本人
目の前にしてそれを言うのか。とゆうかアタックってもはや死語だ
と思うのだが四男。

「よし、お前ら部屋でいちゃついとけ！」

「ちょ…兄貴、皿洗いがまだ…！」

「俺らがやっとかから、ね」

「ほら部屋に戻って！」

「頑張れ？」

兄弟全員にぐいぐいと押され、部屋に収納された私と佐倉さん。

なんとも気まずい空気が流れて黙っていると、佐倉さんはぷっと吹き出した。

「賑やかですね」

「五月蠅いだけッスよ」

「侑里様の家庭を知った時は少し心配だったのですが、明るいようで良かったです」

「…それも知ってるんスね」

私は部屋の電気をつけ、隅の家族写真に目を向けた。

うちの家族構成は、兄2人弟2人そして私のみ。両親は小さい頃にどちらも事故で亡くなった。残された私達は親戚の家を転々として、現在ボロいアパートで兄弟だけで暮らしている。

長男と次男は仕事やバイトで生活費を工面して、私は家事全般をする事になった。生活は裕福なものではないが、それなりに幸せな毎日を過ごしている。

「…えらいですね」

「そんな事ないッス。母親代わりになろうって自分から決めたんスから」

「……………」

私は苦笑いすると、佐倉さんは頭を撫でてくれた。少々恥ずかしかったが、嬉しくもあった。

「それでは」

「？」

佐倉さんは、手を頭からネクタイに移し、そのまま緩めた。私が

ぽかんとしていると、佐倉さんは這うように近付いてきて、私を押し倒した。

突然の事に頭が爆発する。

「は!？ 何故今の流れでそうなるんスカ!？」

「いちゃついとけ、と言われましたので」

「冗談に決まってるッス！」

抜け出そうとするが、両腕をまとめて頭上で固定され、足は乗っかかっているために動かせない。

佐倉さんは妖しく笑う。

「それなりに気に入ったので侑里様の物になってあげてもよろしいですよ？」

「なんスカその下と思わせての上から発言!！」

「家計も助かると思いますか？」

「この流れで家に関する話は卑怯ッス！」

この男細いくせに酷い力だ。それなりに力自慢のある私なのにビクともしない。よく分からない状況にうっすら涙が込み上げてきたのに気付いた佐倉さんは、目尻にキスを落とす。

「抵抗はそんなものですか？」

「っ！ ま、待っ…」

「……………」

佐倉さんの空いた手が頬に添えられ、ゆっくりと近付いてきた顔に堅く目を閉じた。

その時、

ピロピロピロピロ♪
ピロピロピロピロ♪

と軽い音楽がどこから流れてきた。

どうやら佐倉の携帯が鳴ってるらしく、佐倉さんはふうとため息をつき、なんとか未遂で私からどいて通話に出た。私も心の底から安堵のため息をつく。

今の内に離れようと距離を置くと、佐倉さんから「は？」と驚きの声が出た。

「ああ、はい…。あーそうですか。仕方ないですね」

「…？」

「はい、では」

佐倉さんはピツと携帯の通話を切るとにこやかにこちらを見た。ぞつと悪寒が走る。

「部屋が爆破したそうです」

「は？」

「緋色様の実験が原因でぶっ飛んだらしいです」

「えええ！？ どうするんスカ部屋は！」

「もちろんそりゃあ」

にたあ、と最低なほほえみが見えた。その時点で逃げなかった私の負けだろう。

「これから部屋が直るまでよろしくお願いします♪」

「ひ…っ!？」

「…ね。侑里、様」

「…っ、……………っ」

「誰か助けて下さいッスー!!!」

「あれ、今なんか悲鳴聞こえなかったか？」

「えー後、幻聴？ やめてよただでさえシモの相手して頭痛いんだから」

ラッキーアイテムは執事（後書き）

さて前川くんの頭痛は部長のせいなのか、部長への暴言によって発生した呪いのせいなのか。それを知る者は誰もいない。

男子高校生だって魔法少女になりたいんです？

希望する高校が違った為に、中3の受験シーズンからめっきり話す事がなくなってしまった幼なじみの私達。無事どちら共希望の高校に合格したが、祝う事なく入学が来て、もう半年以上たっていた。文化祭を終えて落ち着いて来た頃、幼なじみから手紙が届いた。

奈々へ

相談がある。

次の金曜の放課後、空けといて欲しい。

優樹

それだけ書いてあるシンプルな手紙だった。優樹がわざわざ手紙を私に送ってくるなんてよっぽどの事なんだろうと、もちろん空けた。頼られた事以外にも、単純にまた話せるという事実が嬉しかった。

そして金曜。少し背の伸びた優樹が部屋にやってきた。私達は正座で向かい合う。

静寂の中、彼は言った。

「魔法少女になりたいんだ」

と。

「…ごめん、もう1度言って欲しい」

「だから僕、魔法少女になりたいんだ」

「……………」

いつもの私なら「帰れ！」一択だが、久々の、しかもわざわざ手紙、更にのり付けして頑丈に閉められていた事から察するに、きつと優樹にとっては本気の願いなんだろう。昔よく一緒に魔法少女アニメ見たしね。

家族や他の人にはどうせ馬鹿にされる、または恥ずかしいという理由で私に相談してるに違いない。なのに私まで彼を見放したら誰が相談に乗るといふのだ。

そう考え、私は真剣にその話を考える事にした。自分の顎に手をそえ、真っ直ぐに優樹を見つめる。

「…優樹は男だから難しいと思うの」

「……………」

優樹は少し黙って俯いた。見るとどうやらじんわりと汗をかいている。しまった、いきなり現実を突きつけすぎたか。

フォローしようと口を開けると、優樹は必死そうに顔を上げた。

「…でもたまにいるよね。敵キャラとか」

確かに、優樹と見た魔法少女アニメは数人の男の子達が敵キャラとして出ていた。話が進む内に仲間となるのだが、まあ今はそれは置いておくとして。

「でもそうすると少女じゃない気がするわ」

「いざとなれば僕女顔だから女装出来ると思うし、僕も少女にこだわってるわけじゃないからそこはいいよ」

「問題は性別じゃない、か…」

ふんふん、と頷く私達。なんだか深刻な話っぽくなってきたが、こういう雰囲気でもいいんだよね？

「問題は魔法なんていう非科学的能力をどうやって身に付けるかってところよね」

「…そうだね」

断言してみたはいいが、ちょっと不安だった。優樹が賛同したのはどうやら正解だったようだ。

私は昔のアニメの最初の部分を思い出す。

「えっと…あれは主人公の女の子と魔女の出会いから始まるんだっ
たかしら」

「うん。つまり、まずは見つけなくちゃいけないって事なのかな」

「そうね」

あのお話は、いかにもな場所で魔女と会っているが、この辺りはいたって都会で怪しい場所なんて特にない。新しく出来たお店なんかもない。しいていえばケーキ屋が最近出来たが、普通に小綺麗なお店だった。

「山とか行ってみる？」

「うーん…出来れば地元で見つけないかな」

「そうよね、いちいち山に通うのも面倒臭いわよね」

「うん」

何故かそこは現実的らしい。探すにしてもなかなか難しいものだ。

ほうきで学校と山を行き来する優樹を想像して、ハッと気付いた。そうudahouきだ。魔女探しなんかよりも前に解決しておかなければならない問題が出てきた。

「優樹」

「え、何？」

「優樹って高いところ苦手じゃなかったっけ？」

「え」

言った途端、優樹の身体が固まったのを感じた。やはりまだ幼少期の頃から改善されてなかったらしい。これは由々しき事態だ。

「魔法少女になるのに高いところが苦手なんて論外よ!？」

「う…」

私が床を叩いて指摘すると、優樹は正座から体育座りに変更し、目を反らした。都合が悪い事があるとすぐ身を縮こませるクセもまだ健在らしい。

「だって…怖いし」

「そんな事言ったらいつまでも空飛べないわよ」

「魔法が使えたら、落ちたって怖くないじゃん」

「魔法が上手にすぐ使えるってわけじゃないでしょう」

「………」

今の内に弱点は極力減らしておいた方が身のためだ。いつか敵が出て来て、やられてしまったんではやり直しがきかない。ここは現実世界なんだから。

：なんだかすごい矛盾を言ってるような気もするが、今は気にしないでおこう。

私は優樹を引っ張って、立ち上がった。

「練習として屋根に上がるわよ」

「え、いや、待って。心の準備が」

「私が隣に居るから大丈夫よ！」

半ば引きずるように、優樹と窓から出て屋根の上に足をつける。

風が出ていて気持ち良かった。

しかし隣に居る優樹がガクガクと震えていて、私にしがみついている。昔からとはいえ、今の優樹にしがみつかれるとさすがに重い。

「む、無理、戻りたい」

「せめてここで5分」

「な、なな奈々の優しさって、む昔から厳しいね」

「愛の鞭よ」

結局5分間しがみつかれ、ただ私の肩がこっただけでそれは終了してしまった。

翌日土曜。とりあえず魔女探しから始めてみようという事で再び優樹と会う事になった。服を決めるのに30分もかかり、昔はお気楽だったなあとしみじみ考える。

約束の時間に外に出ると、もう優樹は出ていた。相変わらず細くて華奢な身体だ。

「お待たせ」

「あ、ううん、……、」

私を見つけた優樹は、目を丸くして私を見つめた。何だろう、なんか変だったのか。

「…奈々、服の趣味変わった？」

「え？ あー…最近ワンピースとか着るようになったわ」

優樹は「へえ」と言って私の着ているワンピースに触れ、うんと頷いた。

「似合ってる」

「！」

優樹の笑顔にかつと身体が赤くなり、目を背けた。お世辞が出来る程度には成長したってところだろうか。

「ば、馬鹿な事言っでないで行くわよ！」

「ふふ、うん」

とりあえずは人気のないところを順に回っていこうという事になった。

まずは児童公園を抜けて、小さな裏山にたどり着く。昔優樹とよく遊びに来た懐かしい場所だ。

「…変わらないね」

「そうね。よくここらへんを走ったわ」

「奈々は運動全般得意なのに走るのだけはめっちゃ遅かったよね。今も？」

「…残念ながら今もよ」

そう言うのと優樹は安心したように笑った。私もつられて笑ってしまった。

そこは昔と全く変わらない風景で、特に魔女が出そうなどころではなかった為場所を移した。

次来たのは町の小さな神社だ。昔は妙に静かで落ち着かなかったが、今はこの雰囲気になかなか好きだ。それは優樹も同じらしく暫く無言で歩いた。

奥の竹林まで来て、ふと思い出した。

「そーいやここでカップル誕生の瞬間見たわよね」

「あー、みたみた！ 高校生ぐらいの人達ね」

「そうそう。告白からOKしてキスするところまで見…て…」

「んで結局僕らが気ままずくなっちゃっ…て…」

「……………」

「……………」

気ままずいリターンズ。そーいや私達あの頃のカップルと似た年じやないか今。

私達は黙ってお互い明後日の方向を見た。嗚呼完全に私のせいじやないか馬鹿、と自分に悪態をついていると、優樹はふふと笑い出した。不思議に思っつて優樹の方を見ると、なんだか楽しそうに笑っている。

「魔女探しっというか…思い出巡りだよねコレ」

「あ、そうよねごめん。えっと他は…」

「もういいよ奈々」

歩き出した私を、優樹は優しく引き止めた。言い出しっぺは優樹だろうと言おうとしたが、「実は」と優樹が先に言い出した。

「魔法少女になりたいって嘘。ごめん」

「……はい？」

私はなんだか安心したようながっかりしたような気持ちになって聞き返した。優樹は照れくさそうに笑う。

「いや、まさか奈々がそこまで真剣に悩んでくれるなんて思わなかったからちよつと焦った」

「だ、だって、いや、でもなんでわざわざそんな嘘を」

「なんでもいいから奈々と会いたかったんだ」

優樹はさらっと言った。私は最初ぽかんとしたが、徐々にその意味が分かり熱くなってきた。そして優樹からとどめの一言。

「奈々が好き」

「な…っ!!」

「会えなくて寂しかった」

「な、ななな、ば、馬鹿なこと、いい、いって、」

「これは嘘じゃないよ」

まるで昔のカップルみたいだ。男が告白し、女の方は面白いくらいうろたえていた。やっとあの女の人の気持ちがあった。

私がまともな日本語を喋れずにいると、優樹は寂しそうに言った。

「奈々は僕が居なくても寂しくなかった？」
「…っそんな事ない！」

やっと喋れたと思ったたらかなり大きな声が出た。ますます恥ずかしくなって赤くなる。

優樹はじゃあ、と続けた。

「会いたかった？」

「…あい、たかったわよ」

「…じゃあ僕の事」

優樹の手が私の肩に置かれた。
後は、言わずもがな。

「好き？」

「……………好き」

そんな中、この一部始終を見ている男女が居るなんて私達は全然

気付かないでいた。

「きゃーカップル誕生だね、透也くん！」

「し、静かにして下さい、バレちゃいますよ！」

「私もあんな風に告白されてみたいなあ…なんて」

「……僕が貴女の背を抜かすまで待ってて下さい」

「へ？　なんか言った？」

「っ！　いいえ！」

男子高校生だって魔法少女になりたいんです？（後書き）

優樹くんの想いを知った上でもう一度読んで頂けると、冒頭部分が
大変馬鹿ぽいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6294v/>

ラブカオス★ライフ

2011年10月7日02時40分発行